

イザヤ書 51：12～16

ルカによる福音書 12：1～7

「だれを恐れるべきか」

<敵意と群衆に囲まれて>

今日からルカによる福音書の12章に入ります。これまでの11章では、イエスさまが神の力で、神のご支配、神の国を実現する方であること。このイエスさまをお遣わし下さった神さまは、わたしたちの父となって下さり、愛する子どもであるわたしたちが求めるものを、必ず与えて下さること。しかも、最も良いもの、聖霊を与えて下さること。だから、この父なる神さま、イエスさまの、神の言葉を聞いて、守る者。受け入れ、信じて、イエスさまのものとされて、恵みの中を歩む者は、幸いだ、ということが語られていました。

しかしまた一方で、神の言葉を受け入れない人々。神の言葉を歪めて、自分の思いの実現のために歩んでいる人々。見せかけだけの信仰生活を送り、心の中では神さまに従っていない人々のことを、イエスさまは厳しく非難されて、不幸だ、と仰いました。

そのように言われたのは、ファリサイ派や律法学者と呼ばれる人々です。そして、11章の一番最後、53～54節にあったように、「イエスがそこを出て行かれると、律法学者やファリサイ派の人々は激しい敵意を抱き、いろいろの問題でイエスに質問を浴びせ始め、何か言葉じりをとらえようとねらっていた。」という状況になったのです。

そして、12章1節は、このような状況を受けて始まります。「とにかくするうちに、数えきれないほどの群衆が集まって来て、足を踏み合うほどになった。イエスは、まず弟子たちに話し始められた。」

イエスさまは、激しい敵意を抱いているファリサイ派や律法学者、そして関心を持って集まって来た、数えきれないほどの群衆に取り囲まれました。

そしてそれは、イエスさまと一緒にいる弟子たちもまた、イエスさまに従う者として、イエスさまの仲間として、同じ目で見られるということ。ある人々には敵意を向けられ、また無数の群衆の関心の的になる、ということなのです。

だからイエスさまは、まず、御自分と一緒に多くの人々に囲まれた弟子たちに向けて、話し始められました。それが12章1～53節までです。集まった群衆に向けては、その後、12章54節以下で、「イエスはまた群衆に言われた」とあるように、改めて語りかけられます。

まずイエスさまは、御自分に従う弟子たち、イエスさまに従うゆえに、苦しみを経験したり、敵意を向けられたり、人々に囲まれたりするであろう弟子たちが、どのような態度を取るべきか、どのように歩めば良いかを語られたのです。

<偽善>

さて、まずイエスさまは弟子たちに、「ファリサイ派の人々のパン種に注意しなさい。それは偽善である。」と言われました。

パン種とは、小さい少しのものが、全体に大きな影響を及ぼすことのたとえです。

そして、ファリサイ派というのは、先程もお話ししましたように 11 章で、イエスさまに不幸だと言われて注意された人々です。

イエスさまは、外側は神に従っているように人々に見せかけて、内側は強欲と悪意に満ちている。外側の体の行いと、内側の心の思いが一致しないで、あべこべになっている。そのようなファリサイ派の人々の態度は、偽善だ、とはっきり言われました。そして、弟子たちに、あなたたちも偽善に陥らないように注意しなさい、と言われたのです。

そして、2 節以下にはこのようにあります。「覆われているもので現されないものはなく、隠されているもので知られずに済むものはない。だから、あなたがたが暗闇で言ったことはみな、明るみで聞かれ、奥の間で耳にささやいたことは、屋根の上で言い広められる。」

実はこれを、1 節の続きとしてそのまま読むと、ファリサイ派のように、いくら外側を人々に見栄え良く、信仰深く見せたとしても、心の内側にある強欲や悪意、つまり、神さまに心から従っていないことは、どれだけ覆っても隠し切れないで、いつか必ずバレてしまうぞ、という意味に聞こえます。

しかし、実際にこの 2、3 節は、弟子たちに偽善に注意しなさい、と言った後、4 節以下の関わりにおいて語られていることなのです。

4 節でイエスさまは、「友人であるあなたがたに言うておく。体を殺しても、その後、それ以上何もできない者どもを恐れてはならない。」と言っておられます。

つまり、弟子たちが注意すべき偽善とは、ファリサイ派の人々とは反対で、心の内側ではイエスさまに従い、神のご支配を信じる信仰を持っているのに、人前に出た時に、人を恐れて、その信仰を隠してしまう、ということです。イエスさまに従っていることによって、弟子たちの前には、敵意を向けてくる人々、殺意を抱く人々が現れる。その人々を恐れて、弟子たちが人々の前で、信仰を隠してしまわないように。人々に向かって、イエスさまとの関係を否定することがないように、ということです。

もし、弟子たちが人々を恐れて、心の内側の信仰を隠して、外側はまるで信仰などないかのように、イエスさまと自分には関係ないかのように振る舞うなら、それは弟子たちの偽善になる、ということです。そしてそれは、ファリサイ派の人々が、外側だけ神さまに従うフリをして、心の内側で神さまに背いている偽善と同じこと。内側の心と、外側の行動や態度が一致しておらず、めちゃくちゃになっている、という点では同じ偽善だ、ということになるのです。

イエスさまの弟子として歩む者は、聞いた神の言葉を、信じた神の国の恵みを、与えられた信仰を、人の敵意や迫害を恐れることによって、覆ったり隠したりしてはならないのです。

イエスさまは弟子たちに、敵意に囲まれても、沢山の人々の目の前に立たされることになっても、人を恐れてはならない。イエスさまと共にある、その信仰を守りなさい。その恵みに立ち続け、人々の前で与えられた信仰を表しなさい、と言われたのです。

<必ず顕わになる神の国>

そうであるならば、2節以下は、ファリサイ派のように、覆い隠している心の悪意は必ずバレます、という意味ではなく、むしろ弟子たちの信仰のことが語られているのです。

つまり、迫害する人や、敵意を向けてくる人を恐れて、弟子たちが心の内側に、覆ったり、隠そうとしたりする信仰、神の国、救いの恵みのことを語っているのです。

それらは、「覆われているもので現されないものはなく、隠されているもので知られずに済むものはない。だから、あなたがたが暗闇で言ったことはみな、明るみで聞かれ、奥の間で耳にささやいたことは、屋根の上で言い広められる。」

神の言葉、神の国、信仰、救いの恵み。これらは、どれだけ人が覆ってしまおうとしても、隠そうとしても、必ず表に現わされる、ということです。必ず世界中に知られるのです。どれだけ暗闇に潜んで、奥の間で耳元で小声で語ったとしても、神のご支配が来た、イエスさまによって神さまの救いが実現する、という神の国の福音は、明るみに出され、屋根の上で言い広められ、すべての人々に届くのです。神の言葉そのものに、力があるからです。それが、神の国なのです。イエスさまが、必ず神の国を、救いを実現して下さり、その恵みはすべての人に知られます。神さま御自身が、すべての人に知らせようとしておられるからです。恵みを、すべての人に与えたいと願っておられるからです。

この神の言葉を、弟子たちは聞いたのであり、恵みを受けたのであり、信じたのです。だからその信仰は、弟子たちが覆ったり隠したりするべきものではありません。人の目を恐れて、人の敵意を恐れて、内側に秘めてしまうようなものではない。言い換えれば、覆っても、隠しても無駄なのです。神の力で、やがて必ず人々に明らかにされ、知られるものなのです。

だから、イエスさまに従う者は、内側も外側も、心も思いも身体の行いも態度も、与えられた存在のすべてで、神さまをほめたたえ、神さまに信頼し、受けた恵みを、与えられた信仰を、人々の前で証しする者として歩みなさい、と言われているのです。

信仰というのは、心の内側だけで信じていれば良い、思っていれば良い、というものではありません。公に言い表し、その信仰によって命を生きることなのです。

神さまを信じる信仰とは、思想や、哲学や、よりよく生きるための手段ではなくて、頭で考えることではなくて、神さまを信頼して生きること、神さまと共に生きること、そのものなのです。

だから、信仰を内に隠そうとすること、自分の心の中だけの事柄にしようとするのは、本来の信仰の在り方ではありません。わたしたちは、日々の糧を神さまに与えられ、今日の命を神さまに生かされ、一日の歩みを神さまに支えられて、生きているのです。すべてが、神さまの御手の中に置かれ、導かれているのです。そのことに信頼をして、安心をして、今日を生きること。その中で、神さまがどれだけ恵み深いお方かをますます知っていくこと。これが、信仰の歩みであり、人間の最も大きな喜びであり、最も幸いな人生なのです。

信仰を与えられた者は、それを隠したり、覆ったりすることなく、むしろ、父なる神さまの子どもとされていること、イエスさまがわたしの救い主であることを喜んで言い表し、人々に証しをする者とされていくのです。

<恐れ>

でも、わたしたちは、実際にイエスさまを信じる信仰を明らかにすることで、殺されるようになったら、迫害されると分かっていたら、どうしても恐れてしまうのではないのでしょうか。

信仰はわたしたちに、主にある平安を与えてくれます。慰めや、励ましを与えてくれます。でも、その信仰のために、イエスさまの弟子であるために、人々から、あるいは国から攻撃されたり、命に危険が及ぶことも、歴史の中で実際にあることなのです。

日本ではかつて、イエスさまこそまことの神であり、主であると告白することで、迫害されること、捕らわれることがありました。今の時代はそのようなことはありません。心おきなく神さまを礼拝し、自由に信仰を持てることは、とても大きな恵みです。しかし近隣の国では、今まさに信仰のために捕らえられ、迫害を受けるといような事態が起こっています。

また、迫害などがなくても。命の危険がないとしても。今のわたしたちもまた、圧倒的な少数派である日本のキリスト者としては、異質に見られる存在です。そのことを気にして、自分の信仰を人々に明らかにすることを、躊躇うことがあるかも知れません。キリスト教と聞いて相手がどんな反応をするか気にしたり、真剣に復活を信じているのに、それを言うことを恥ずかしいと感じてしまう。そんなことがあるかも知れません。

わたしたちは怖いのです。人々を恐れているのです。それで、相手との関係性が変わるのではないか。好奇の目にさらされるのではないか。否定されたり、傷つけられたりするのではないか。そう思って、人の反応や、対応や、攻撃を恐れているのです。だから思わず、自分で自分を守ろうとして、信仰を隠そうとすることがあるのではないのでしょうか。

信仰を隠すこともまた偽善である、と言われていています。人の前で、あなたはイエスさまとの関係を否定するのか。人の前で、イエスさまを知らないというのか。そう言われると、わたしたちは俯いて、黙り込んでしまうのではないのでしょうか。

しかし、そんなわたしたちの弱さも、愚かさも、イエスさまはよくご存知なのです。世の中で、人々の前で、信仰を言い表すことが、どれだけ難しいことであり、どれだけ大きな試練であるかを、イエスさまはよく知っておられるのです。だからこそ、イエスさまは弟子たちにこのことを語られたのです。励ます御言葉を与えて下さったのです。

<だれを恐れるべきか>

4節で、イエスさまは弟子たちにこのように語りかけられました。

「友人であるあなたがたに言うておく。体を殺しても、その後、それ以上何もできない者どもを恐れてはならない。だれを恐れるべきか、教えよう。それは、殺した後で、地獄に投げ込む権威を持っている方だ。そうだ。言うておくが、この方を恐れなさい。」

わたしたちが恐れている人間は、確かにわたしたちの体を痛めつけ、殺すことができます。しかし、イエスさまは、人間はその後、それ以上何もできないのだ、と言われたのです。それはつまり、人は、死んだその後があるということです。そして人は、そこでは何もできない。だから、体を殺すことしか出来ない人間を恐れなくて良い、と言うのです。

では、だれを恐れるべきか。それは、殺した後で、地獄に投げ込む権威を持っている方こそ、恐れるべきである。そう言われるのです。それは、天の父なる神さまです。

この方は、すべての命を創造し、またそれを取り去ることがお出来になります。そして、さらに、この体の死の向こうで、地上の命の後で、わたしたちに復活の新しい命を与えることも、また滅ぼすこともお出来になる方なのです。天も、地も、時も、命も、あらゆるものを完全に支配しておられるのは、神さまだけです。

だから、ただこの地上の体を殺すことしか出来ない人間は、恐れるに足りない。あなたに新しい命、復活の命を与えることがお出来になる方。また、完全な滅びを与えることが出来る方。この神をこそ、ただ恐れなさい、と言われるのです。

<髪の毛一本さえ>

でもイエスさまは、ここでわたしたちに神に対する恐怖を植え付けて、人間より神さまの方がもっと怖くて、裏切ったあなたを死んだ後に完全に滅ぼすかも知れないから、神さまの方を恐れなさいと、そんな脅しを言うておられるのではありません。わたしたちは、神さまがわたしたちの死後までの生殺与奪の権威を持っておられるから、気に入られようとして、救われようとして、頑張るって従わなければならないのではありません。それなら、この世の恐怖政治を敷く暴君と同じです。

イエスさまが教えて下さったのは、すべてを支配し、命も死も、復活も滅びも、すべての権威を御手の内においておられる、天の父なる神さまが、あなたにとって、どのようなお方かを知りなさい、ということです。

6節以下にはこうあります。「五羽の雀が二アサリオンで売られているではないか。だが、その一羽さえ、神がお忘れになるようなことはない。それどころか、あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている。恐れるな。あなたがたは、たくさんの雀よりもはるかにまさっている。」

雀というのは、わたしたちはとても可愛らしいなんて思いますが、聖書においては殆ど価値がないもののたとえです。ここでも、五羽の雀が二アサリオンで売られている。つまり、

まとめ売りでもしないと、一羽では値段も付けられないし、誰も買ってくれないのです。

そんな雀ですが、天の父なる神さまは、その一羽さえ、お忘れになるようなことがない。どんなに小さいものも、わたしたちが価値がないと思うものでも、神さまは目を留め、心にかけ、慈しまれるお方なのです。

そして、それどころか！神さまによって「あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている」と、イエスさまは言われるのです。小さい雀を忘れないどころか、このわたしの、髪の毛の数まで、その一本まで、神さまは気にかけて下さる方である。神さまはあなたのことをそれほどまでに見つめ、心に留め、愛し、慈しんでおられる。

こんなにあなたを愛している神さまが、あの復活も滅びも支配する、大いなる権威を持つ方なのだ。その方が、あなたのことを心に留め、髪の毛一本も気になって仕方がないと、心を砕いて下さっているのだ。この方に守られているのだから、この方の支配の中にいるのだから、あなたたちは、恐れなくてよいのだ。この世のことを、敵意を向ける人々を、恐れなくてよいのだ。神さまを信頼して、神さまに頼って、与えられた恵みに留まっていなさい。堂々と信仰に生きなさい。イエスさまは、そう仰って下さるのです。

イエスさまは言われます。「あなたがたは、たくさんの雀よりもはるかにまさっている。」

ちょっと面白いのは、イエスさまは、ダイヤモンドとか、金塊よりも、わたしたちがまさっている、とは言われませんでした。人が、あまり価値がないと判断している雀の寄せ集め。それより、はるかにまさっていると、そう言われたのです。

実際、わたしたちは神さまに対して、本来であれば、見限られ、捨てられ、滅ぼされても仕方がないような罪人です。神さまに背き、御言葉を正しく聞かず、神さまの愛を受け入れず、自分勝手に歩んできたのです。神さまに苦しみや悲しみしか負わせない。そんな歩みをしてきた者なのです。

でも神さまは、そんな罪に捕らわれた、どうしようもないわたしたちのために、自分でも救われる価値がないと思ってしまうようなわたしのために、ご自分の御子の命まで与えて下さるお方なのです。それほど、あなたが大事で仕方がない。あまりに貴い存在なのだと、神さまはわたしたち一人一人を心に留め、そう言って下さるといふのです。

<友人>

そして、この神に遣わされた、御子であるイエスさまは、4節で弟子たちのことを、つまりわたしたちのことを「友人であるあなたがた」と言って下さいました。

イエスさまが、弟子たちのことを「友人」「友」と呼ぶ場面は、聖書の中で多くはありません。もう一か所有名なところは、ヨハネによる福音書 15 章 13～15 節です。少し、そこを開いて読んでみましょう。(新約 199 頁)

「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。わたしの命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。もはや、わたしはあなたがたを僕とは呼ばない。僕は主人が何をしているか知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼ぶ。父か

ら聞いたことをすべてあなたがたに知らせたからである。」

イエスさまは、「あなたがたはわたしの友である」と言われます。そして、「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。」と言っておられます。

神さまの御心を実現するために、つまり、わたしたちを救うために、この世に遣わされたイエスさまは、弟子たちを、わたしたちを、友と呼んで下さいました。そして、ご自分の命を捨てるほどに、友であるわたしたちを愛して下さいました。それを示すのが、イエスさまの十字架の死です。イエスさまの十字架には、この方を遣わして下さいました父なる神さまの愛が、そして、友と呼んで命を捨てて下さるイエスさまのわたしたちへの愛が示されています。

そうして、イエスさまは御自分の命によって、わたしたちの弱さを、罪を、滅びをすべて担い、贖って下さったのです。また、父なる神さまは、このイエスさまを復活させ、イエスさまを信じるわたしたちにも、復活の命を与えることを、約束して下さいましたのです。

わたしたちは、このようなイエスさまの愛に、父なる神さまの愛に、包まれているのです。このような神さまに、命を与えられ、生かされ、守られているのです。世の苦しみをすべて覆って余りある、大きな恵みが、救いが、命が、備えられているのです。

だから、恐れるな。今日イエスさまが語って下さったことは、御自分に従う者たちへの、そのような約束であり、励ましなのです。

わたしたちの信仰とは、神さまに愛されているということ。イエスさまが友と呼んで下さるということ。聖霊を与えられ、神さまの子どもとして生きるということです。

わたしたちは、人の目を恐れてこの信仰を隠すのではなく、神さまの慈しみの眼差しの中に置かれていることを覚えて、この信仰を自分の存在すべてで喜びたいのです。この信仰にあって生きていることを、人々に告げ、恵みを証ししていきたいのです。

あらゆる権威をお持ちの神さまが、わたしの味方でいて下さるなら。神の国を実現なさるイエスさまが、わたしの友でいて下さるなら。わたしたちには必ず、その信仰に立ち続け、証しするために必要な力が、時が、導きが、与えられるに違いありません。

【お祈り】

天の父なる神さま

あなたが御子イエスさまを遣わして下さり、聖霊を与えて下さり、わたしたちを罪と死から救い出して、信仰に生きる者とし、神さまの子どもとして生きる恵みを与えて下さることを、心から感謝いたします。

しかし、わたしたちは人の目を恐れ、信仰を言い表すことを躊躇ったり、隠したりしてしまうことがあります。それは、御心に適うことではありません。

神さま、どうかわたしたちが、人を恐れることなく、ただあなただけを恐れ、信仰に固く立つことが出来るようにして下さい。あなたは、わたしたちの髪の毛一本まで顧みて下さるほどに、わたしたちを愛し、慈しみ、心にかけて、守っていて下さいます。どうか、その御手に素直に自分をお委ねし、ただ神さまを信頼して、信仰の日々を歩むことが出来ますように。そして、日々の中で、イエスさまと共に生きる喜びを隣人に証しする者として下さい。

そして、救いの恵みが、すべての人に知られ、すべての人が信仰を与えられ、神さまの御国が来ますように。

イエスさまの御名によって祈ります。アーメン